

深読み

長内 智

(株)大和総研
金融調査部
主任研究員

証券投資の羅針盤

10 リーマン・ショック発生から15年

「百年に一度」の危機

■世界中の投資家が震撼

おそらく読者の多くの方は、かつて個人投資家が「リーマン・ショック」で大損したという話を聞いたことがあると思います。筆者と同様、実際に直面した人もいるかもしれません。リーマン・ショックは、2008年9月15日、米大手投資銀行のリーマン・ブラザーズが経営破綻したことに由来します。

その後、世界金融危機と世界景気後退へと発展したことから、日本では、歴史的な出来事としてリーマン・ショックという単語が頻繁に登場するようになったのです。そして気づけば、リーマン・ショック発生からまもなく15年になります。

当時を振り返ると、リーマン・ショック以降の株式市場は、米国株に連動する形で世界的に株価が急落し、日本株も大幅な下落を余儀なくされました。まさに、世界中の投資家を震撼させる事態に陥ったといえます。

■海外で通じない和製英語

日本では、2008年以降の世界金融危機のこともリーマン・ショックと表現することが多いと思います。しかし、通常、海外では、リーマン・ブラザーズの経営破綻と世界金融危機を明確に分けており、リーマン・ショックという単語もほとんど見ません。つまり、リーマン・ショックは和製英語ということです。

実際、海外メディアの英語ニュース等で、リーマン・ショック (Lehman Shock) と検索しても、ほとんどヒットしません。もしヒットしても、それは海外メディアでなく、日本メディアの英語版であるケースが多いと思います。

海外では、文字どおり、リーマン・ブラザーズの経営破綻 (Collapse / Bankruptcy of Lehman Brothers)、金融危機 (Financial Crisis) や世界金融危機 (Global Financial Crisis) という表記になっています。

■世界恐慌を意識した表現

2008年以降に発生したリーマン・ショックや世界金融危機、世界景気後退のことを「百年に一度」の危機と呼ぶケースもあります。この表現は、米国のグリーンズパン元FRB (米連邦準備制度理事会) 議長の発言がきっかけです。

同氏は、2008年9月の米メディア向けのインタビューで「百年に一度 (Once-in-a-Century) 起こるタイプの金融危機」と述べ、さらに翌10月の米国下院の公聴会において「百年に一度の信用の津波 (Tsunami)」と言及しました。

この「百年に一度」という表現は、1929年の株価暴落と、その後の世界恐慌を意識したものとされています。つまり、当時直面していた危機を、世界恐慌以来となる非常に深刻なものであると評価したのです。

また、こうした認識が徐々に広がる中、2008年末以降の世界景気後退のことを、英語

で「グレート・リセッション (the Great Recession)」と呼ぶケースも増えてきました。これは、1929年末以降の世界恐慌 (the Great Depression) に対応する英語表現になっています。

本当に「百年に一度」なのか？

■米国経済の悪化度合い

2008年末以降の世界景気後退は、本当に「百年に一度」の規模だったのでしょうか。この点について、危機の震源地である米国経済の状況を世界恐慌時と比較してみましょう。

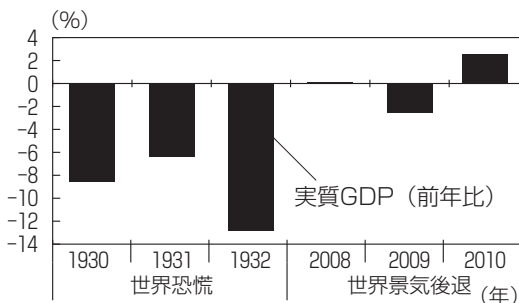
経済成長率を示す実質GDP（国内総生産）の前年比は、世界恐慌時の1930年にマイナス8.5%と大きく落ち込み、さらに、1932年にマイナス幅を一段と拡大させました（**図表**）。他方、世界景気後退時は、2009年にマイナス2.6%となった一方、その翌2010年はプラス成長に回復しています。

■世界恐慌の厳しさ

経済・社会構造や金融環境が劇的に異なっているため、両時期を単純に比較することはできません。ただ、世界恐慌は、世界景気後退とは比べ物にならないほど悲惨な状況だった様子がかがえます。

いずれにせよ、リーマン・ショック発生から15年を機に、過去のさまざまな危機について少し振り返ってみるのもよいかもしれません。

【図表】過去の危機と米国経済



(出所) Haver Analytics, 米BEAより大和総研作成

相場の格言

名人は相場の恐さを知る

■相場を甘く見るべからず

投資に精通して名人と呼ばれるような人は、相場で常に勝ち続けてきたわけではなく、相場の急落などさまざまな苦難に直面し、それらをくぐり抜けてきたという経験を数多く積んでいます。

そのため、相場の恐さを十分に知っており、たとえ投資成績が予想以上に順調であっても相場を甘く見ることはなく、基本的に大きく失敗することもあります。さらに、金融危機のような状況が発生した場合でも、さほど動揺することなく、損失をできる限り抑えながら、冷静かつ柔軟に取引を行えるのです。

「名人は相場の恐さを知る」という格言は、投資の名人と呼べるような人でも相場の恐さを意識して投資を行っているのだから、相場を甘く見て簡単に大儲けしようと考え、多額の資金を一度に投資したり、短期的な株価上昇に飛び乗ったりするような投資行動は避けるべき、ということを表しています。

■順調なときほど意識したい

筆者は、名人と呼べるレベルに達していませんが、この格言の教訓と有用性を自ら実感する機会がありました。

具体的には、2008年のリーマン・ショックの際、相場を甘く見ていた筆者は、金銭的にも精神的にも大きなダメージを被りました。この経験を教訓に、危機時の備えとして、投資資金をすべて投資するのではなく、余裕資金を常に残すようにしました。その結果、2020年に発生した新型コロナ危機の際には、大幅に下落した局面で個別株や投資信託を購入するなど、ある程度柔軟に対応することができました。

株式市場が好調で投資成績が順調な時ほど、忘れず意識しておきたい格言だと思えます。